TOP MUSEUM

東京都写真美術館
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
Yebisu Garden Place, 1-13-3 Mita Meguro-ku Tokyo 153-0062
TEL 03-3280-0099　FAX 03-3280-0033
www.topmuseum.jp

2020/02/03

写真とファッション　90 年代以降の関係性を探る

Photography and Fashion Since the 1990s

2020 年 3 月 3 日（火）－5 月 10 日（日）

展覧会概要

東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団では、Tokyo Tokyo FESTIVAL の一環として「写真とファッション　90 年代以降の関係性を探る」展を実施いたします。

本展覧会は 1990 年代以降の写真とファッションについて、国内外のアーティストによる作品で写真とファッションの関係性を探る試みです。監修には、長年にわたり文化誌『花椿』の編集者としてファッションやアートの世界を見つめてきた林央子（はやし・なかこ）氏を迎えます。

時代のターニングポイントとなった稀少なファッション誌の展示や、トークイベントの開催により、様々な角度から写真とファッションをお楽しみください。

アンダース・エドストローム〈Martin Margiela spring/summer 94〉より
1993 年 作家蔵 ©Anders Edström

文化でつながる、未来とつながる。
Tokyo Tokyo FESTIVAL

本展について

本展覧会では、「写真とファッション」をテーマに、1990 年代以降の写真とファッションの関係性を探ります。

これまでのファッションが発展する過程において、写真は衣服が持つ魅力を伝えるという重要な役割を担ってきました。写真によって作り出されるイメージは、ときには衣服そのものよりも人々を惹きつけ、時代を象徴するイメージとなっています。

1990 年代に入り、ファッションの魅力を伝えるという枠組みを超え、人々に訴えかけるイメージを作り出す写真家や、インディペンデントなスタンスで情報を発信するファッション誌が登場しました。新しい視点から生み出されたイメージは、人々の考え方やライフスタイルにも影響を与え、その後の世代にも繰り返し参照されています。

写真とファッションの関係性は、インターネットが普及した 2000 年代以降、さらなる変化を遂げます。かつては新聞や雑誌の編集者、記者など、限られた人々を介して伝えられていた最新のファッションショーや展示会の様子も、近年ではツイッターやインスタグラムなどの SNS を通して、タイムラグなく一般の人々の手元に届けられるようになりました。また、情報を受け取るだけではなく、タグ付けをしたセルフィー（自撮り）に代表されるように、受け手自身も様々な形で情報発信を行っています。

本展覧会は、長年にわたり文化誌『花椿』の編集者としてファッションやアートの世界を見つめてきた林央子氏を監修に迎え、国内外のアーティストによる作品を通して「写真とファッション」の関係性を探る試みです。時代のターニングポイントとなった稀少なファッション誌の展示や、関連イベントなどとともに、様々な角度から写真とファッションをお楽しみください。

出品作家（6 作家）

アンダース・エドストローム、髙橋恭司、エレン・フライス、前田征紀、PUGMENT、ホンマタカシ

展示構成（予定）

1　アンダース・エドストローム
2　資料展示：雑誌『Purple』、『here and there』
3　髙橋恭司
4　エレン・フライス×前田征紀
5　PUGMENT×ホンマタカシ
6　PUGMENT

出品点数

約 80 点（予定）

本展のみどころ

■ 1990 年代以降の写真とファッションの関係性に迫る意欲的な展覧会

本展は、1990 年代以降のファッションシーンを代表するイメージを作り出した写真家やアーティストに注目し、写真とファッションが相互に与えた影響と、その関係性を再検証する意欲的な展覧会です。

　数多くのファッション写真を手がけているアンダース・エドストロームや髙橋恭司の写真作品、新進気鋭のファッション・レーベル PUGMENT と、アートやファッションの分野で精力的に発表を続けるホンマタカシの美術館初公開となるコラボレーション作品など、写真・映像・インスタレーションによる約 80 点の多彩な表現をご紹介いたします。

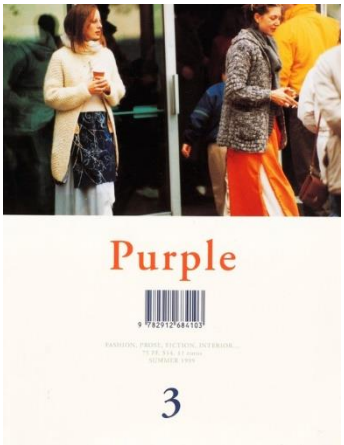
■ つくる、つたえる、つながる——創造の源泉に触れる

本展は、独自のスタイルを確立し、現在も第一線で活躍する作家たちの創造の源泉に触れる貴重な機会です。

　インディペンデントな編集方針で知られるファッション・カルチャー誌『Purple』*をきっかけに関係性を育んできた、エレン・フライスと前田征紀が本展のための新作コラボレーションを発表。創造の源泉に触れるような空間展示によって、彼らの実験精神やものづくりへの信念を知ることができるでしょう。

　誰もが気軽に作り手となって発信できる時代に、つくること、つたえること、共鳴する他者とつながる（共感する）ことの喜びと可能性を見つめ直します。

*『Purple（パープル）』…フランスで 1992 年に創刊された、ファッション・カルチャー誌。
　創刊者の一人はエレン・フライス。



『Purple』vol.3（1999 年）表紙

撮影：アンダース・エドストローム

■ 都内 2 箇所で本展関連サテライト展示を開催！

本展では、「People」（恵比寿）、「BEAMS JAPAN」（新宿）で「写真とファッション」展関連サテライト展示を開催いたします。新たな価値観との出会いの機会を創出する、注目のスペースで開催されるイベントにご期待ください。

■ オリジナル・グッズ、関連書籍にも注目！

本展では、展覧会公式図録のほか、本展オリジナル・グッズを制作予定です。また、展覧会の開催に合わせて本展監修者や出品作家による新刊書籍の刊行も予定されています。

　若者を中心に 1990 年代のファッションが再び注目を集める今、ファッションの転換点となった時代を紐解くための手がかりとなる書籍とともに、本展覧会にご注目ください。

出品作家紹介

アンダース・エドストローム｜Anders Edström

1966 年、スウェーデン生まれ。1990 年にパリ移住後、デザイナーのマルタン・マルジェラと仕事を始め、メゾン・マルタン・マルジェラの撮影を長年にわたって手がけた。ファッション・カルチャー誌『Purple』など、雑誌でも多くの作品を発表。主な個展に「Spreads」（Fullersta Gård、2019 年）、主なグループ展に「Not in Fashion」（フランクフルト現代美術館、2010 年）、「第 2 回恵比寿映像祭」（東京都写真美術館、2010 年）、「抽象と形態：何処までも顕れないもの」（DIC 川村記念美術館、2012 年）、「Elysian Fields」（ポンピドゥー・センター、2000 年）など。

アンダース・エドストローム
〈Martin Margiela spring/summer 94〉より
1993 年 作家蔵
©Anders Edström

髙橋恭司｜Takahashi Kyoji

1960 年生まれ。1990 年代より広告や『Purple』などファッション・カルチャー誌で作品を発表。個展「夜の深み」（nap gallery、2016 年）、「WOrld's End」（nap gallery、2019 年）、グループ展「Elysian Fields」（ポンピドゥー・センター、2000 年）ほか。写真集に『The Mad Broom of Life』（用美社、1994 年）、『Road Movie』（リトルモア、1995 年）、『Takahashi Kyoji』（光琳社出版、1996 年）、『Life Goes On』（光琳社出版、1997 年）、『WOrld's End』（Blue Sheep、2019 年）など。

髙橋恭司《Tokyo Girl》
〈The Mad Broom of Life〉より 1992 年 作家蔵
©Kyoji Takahashi, courtesy of nap gallery

エレン・フライス｜Elein Fleiss

1968 年、フランス生まれ。1992 年から 2000 年初頭にかけて、インディペンデントな編集方針によるファッション・カルチャー誌『Purple』を発行。2004 年から 2008 年まで、個人的な視点にもとづくジャーナリズム誌『The Purple Journal』を発行した。現在はフランス南西部の田舎町を拠点に、写真や文章による作家活動を行っている。

エレン・フライス〈Landscapes〉より 2019 年
作家蔵（参考図版） ©Elein Fleiss

前田征紀｜Maeda Yukinori

現代美術作家、COSMIC WONDER 主宰。写真、立体、絵画などで自身の経験した事象を主体とした精神的な空間を表現している。主な個展に「溌墨智異竜宮山水図」（タカ・イシイギャラリー、2018 年）、主なグループ展に「ヨコハマトリエンナーレ 2011 OUR MAGIC HOUR―世界はどこまで知ることができるか？―」（横浜美術館ほか、2011 年）など。現在は京都北部の里山にある茅葺屋根の古民家を拠点に活動している。

前田征紀《Tenjiku truck stop》2020 年 作家蔵
©Yukinori Maeda, courtesy of Taka Ishii Gallery

PUGMENT｜パグメント

2014 年に東京で創設されたファッション・レーベル。人間の営みにおいて衣服の価値や意味が変容していくプロセスを観察し、衣服の制作工程に組み込む。ファッションにまつわるイメージと人との関係性に着目し、すでにある価値・環境・情報について別の視点を持つための衣服を発表している。主な発表として「1XXX–2018–2XXX」（KAYOKOYUKI / Utrecht / n id a deux、2018 年）、「MOT アニュアル 2019 Echo after Echo：仮の声、新しい影」（東京都現代美術館、2019-20 年）など。

PUGMENT〈Spring 2018〉より 2017 年
（撮影：三野新）
©PUGMENT

ホンマタカシ｜Homma Takashi

1962 年、東京生まれ。写真集多数、著書に『たのしい写真 よい子のための写真教室』（平凡社、2009 年）がある。近年の作品集に『THE NARCISSISTIC CITY』（MACK、2016 年）、『TRAILS』（MACK、2019 年）、『Looking Through: Le Corbusier Windows』（一般財団法人 窓研究所／カナダ建築センター／ヴァルター・ケーニッヒ、2020 年）など。現在、東京造形大学大学院客員教授。

PUGMENT×ホンマタカシ 〈Images〉より
2019 年 作家蔵
©PUGMENT/©Takashi Homma

関連イベント／サテライト展示

出品作家とゲストによる鼎談

2020 年 4 月 11 日（土）15:00－16:30
髙橋恭司×安野谷昌穂（美術家）×大城壮平（『VOSTOK』編集長）
会場：東京都写真美術館 1 階スタジオ
定員：50 名　※当日 10 時より 1 階受付にて整理券を配布します。番号順入場、自由席。

PUGMENT（出品作家）による 2020 年秋冬コレクションのプレゼンテーション

2020 年 4 月 19 日（日）日時は詳細が決定次第、お知らせします
会場：東京都写真美術館 1 階ホール
定員：190 名　※当日 10 時より 1 階受付にて整理券を配布します。番号順入場、自由席。

展覧会担当学芸員によるギャラリートーク／手話通訳付きギャラリートーク

会期中の第 2・第 4 金曜日 14:00 より担当学芸員によるギャラリートークを行います。
本展チケット（当日消印）をご持参のうえ、2 階展示室入口にお集まりください。
2020 年 3 月 27 日は手話通訳付きで行います。

本展関連サテライト展示

当館での展示に関連した作品や資料の展示を行います。各々の詳細は PUGMENT が運営する People、およびセレクトショップ BEAMS のホームページでご確認ください。

People（東京都渋谷区恵比寿 1-18-4 NADiff A/P/A/R/T 2F）
会期：3 月 6 日（金）－29 日（日）※会期中、金・土・日曜日のみオープン
https://wepeople.work/

BEAMS JAPAN（東京都新宿区新宿 3-32-6 BEAMS JAPAN 4F）
会期：3 月 3 日（火）－11 日（水）
TEL: 03-5368-7300
www.beams.co.jp

※事業はやむを得ない事情で変更することがございます。あらかじめご了承ください。

「90 年代からの写真とファッション」　林 央子（編集者・本展監修者）

1990 年代からの写真とファッション。このテーマによる展覧会の監修を依頼されたとき、1988 年から雑誌編集の仕事についていた私はあらためて、90 年代という時代が歴史的に回顧されるときが訪れたのだ、ということに感慨をもった。

まずはじめに、与えられた最初のキーワードは「90 年代」。そこから「写真とファッション」という文化を考える上で、必然的に浮かび上がってきたひと連なりのキーワードがあった。「雑誌」「対話」「協働」「東京」「編集」「自由化」「ストリート」――これらを主軸に、展覧会の構想を考えていった。

人々のつながりや文化体験、ショッピングのあり方を根本的に変えたスマートフォンがひろく普及したのは、2010 年代以降のこと。2020 年のいま、写真をめぐる文化について考えたときに、スマホ以前とスマホ以後の最大の違いは、「雑誌」の時代とそれが消えてから、ということに集約できるだろう。90 年代は、「雑誌」を土台にファッションや音楽の流行が生まれた、あるいは「雑誌」主導で流行現象がつくられていった時代だった。

多くの「写真」が、編集者と写真家の「協働」によって、「雑誌」の紙に印刷されるためにつくられてきた。その「雑誌」というものの多くが消えていき、あるいは広告の受け皿となって形骸化し、またはウェブマガジンにとってかわられた今、「写真」というものの生まれかたが、変貌を遂げているのではないだろうか。

図録『写真とファッション』より一部抜粋

本展監修者

林 央子｜Hayashi Nakako

1966 年生まれ。資生堂『花椿』編集部に所属（1988–2001 年）の後、フリーランスに。2002 年、同時代を生きるアーティストとの対話から紡ぎ出す個人雑誌『here and there』を創刊。2011 年に刊行した『拡張するファッション』（スペースシャワーネットワーク）では、ファッションを軸に現代的なものづくりや表現の方法を探っている国内外のアーティストたちの仕事を紹介。2014 年には、同書で紹介した作家たちを含むグループ展「拡張するファッション」展（水戸芸術館現代美術センター、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館）が開催された。

展覧会図録

『写真とファッション』

出品作品図版のほか、本展監修者、担当学芸員によるテキスト、作家略歴等を収録。
B5 判、価格未定、東京都写真美術館刊、3 月 3 日発売（予定）。

関連書籍

『エレンの日記』エレン・フライス［著］／林 央子［訳］

雑誌『流行通信』にて連載（2001－2005 年）された日記エッセイをまとめた一冊。『Purple』を共に立ち上げたオリヴィエ・ザームと袂を分かち、自身で『The Purple Journal（ザ・パープル・ジャーナル）』や『Hélène（エレーヌ）』を刊行していた頃のエレンの心境や彼女の一貫した美学が、アーティストたちとの交流、旅行先での出会い、文学や映画への情熱、日常のメモランダムを通して描かれています。翻訳は連載当時からエレンと交友のある林央子が担当。アダチプレス刊、 3 月上旬発売（予定）。

『here and there』林 央子［編集・発行］

本展監修者の林央子が編集・発行する個人雑誌、『here and there』の新刊が 3 月発売予定。

開催概要

展覧会名[和]　写真とファッション　90 年代以降の関係性を探る
展覧会名[英]　Photography and Fashion Since the 1990s
主　催　公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館、読売新聞社、美術館連絡協議会
協　賛　ライオン、大日本印刷、損保ジャパン日本興亜、日本テレビ放送網、東京都写真美術館支援会員
会　期　2020 年 3 月 3 日（火）― 5 月 10 日（日）
会　場　東京都写真美術館 2 階展示室
〒153-0062　東京都目黒区三田 1-13-3　恵比寿ガーデンプレイス内
URL www.topmuseum.jp / 電話 03-3280-0099
開館時間　10:00－18:00（木・金は 20:00 まで）※入館は閉館の 30 分前まで
休館日　毎週月曜日（ただし月曜日が祝日の場合は開館し、翌火曜日休館）
※ゴールデン･ウィーク期間中の休館日は決定次第お知らせします
観覧料　一般 800（640）円 ほか
※（　）は 20 名以上団体、小学生以下および都内在住・在学の中学生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料、
第 3 水曜日は 65 歳以上無料、ウェルカムユース期間中（3/20－4/5）は 18 歳以下［2001 年 4 月 2 日以降に生まれた方］無料。

このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版をデータにてご用意しております。掲載をご希望の際は、広報担当までご連絡ください。

＊図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。
＊図版の無断掲載はご遠慮ください。また、トリミング、文字掛け等の加工はできません。

東京都写真美術館

TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
電話 03-3280-0034 / FAX 03-3280-0033 / www.topmuseum.jp

展覧会担当　伊藤 貴弘　t.ito@topmuseum.jp ／ 山田裕理　y.yamada@topmuseum.jp
広報担当　　久代 明子　平澤 綾乃　岡田なつき　press-info@topmuseum.jp